

春の風物詩の位置をタネツケバナにとって代わるか？

新顔のミチタネツケバナ

森 田 弘 彦

つくばで新しい帰化植物ミチタネツケバナが在来タネツケバナに果敢に挑んで生態的位置を奪い取ろうとしているように見える。

この植物はつくばや土浦の市内にはすでに随分広がっているようで、筆者の宿舎（竹園）の庭にも発生する。農林団地では、408号線との交差点周辺や中央分離帯、家畜衛試から羽成へ抜ける道路や農林連絡道路沿いに普通にみられる。

ヨーロッパ原産の *Cardamine hirsuta* L. は1992年に工藤 洋氏らによって日本への帰化を報告され、ミチタネツケバナの和名を付けられた。これを報じた雑誌を引越し荷物の中から引き出せなかったのが確かでないが、北陸あたりでみつけたもののように思う。ヨーロッパでは普通の雑草で、Galgy Weed Tables の43-1には着色のよい図とともに“cosmopolitan”と記されている。隣の中国にも分布し、「碎米薺」と呼ばれている。わが国ではこの名は昔からタネツケバナ *C. flexuosa* With. の漢名に充てられてきたようである。

タネツケバナは「種浸け花」で、苗代に種籾を播種する頃に開花するのでこう呼ばれる冬生一年生の雑草で、水田裏作で主要な雑草になっている。もちろんつくば周辺にもごく普通にある。

6本の雄蕊が退化して5本や4本になる花が必ず混じっているのが一番確実な特長である。ミチタネツケバナの花は小さく、花卉の幅は約

1mm（タネツケバナでは2mm）。花序の先端で長角果に囲まれてこじんまりと固まって咲く。タネツケバナのように花序の先端に群がっては着かない。慣れればこの状態で遠くからでも識別できる。種子には狭い翼があり、それを含めて長さ2mm、幅1mm。タネツケバナの種子には翼はない。花期はタネツケバナより少し早い。タネツケバナに比べると全体に毛が少なく、茎や葉の裂片の縁にのみまばらにある。種小名の *hirsuta* や英名の hairy bittercress はともに「多毛」の意味であるが、本種には毛が少ないので、イギリスの図鑑でさえ「非常に不適当な命名だ。」と書いている。つくば界隈の畦道の春を告げるのが、タネツケバナの開花からミチタネツケバナのそれへと移ってしまうのであろうか。



財団法人 日本植物調節剤研究協会
東京都台東区台東1丁目26番6号
電話 東京(03)3832-4188 (代)

編集人 日本植物調節剤研究協会 会長 千坂英雄
発行人 植調編集印刷事務所 広田伸七

東京都台東区台東1-26-6 全国農村教育協会
発行所 植調編集印刷事務所
電話 東京(03)3833-1821番(代)
印刷所 新成印刷(南)

平成10年2月発行
植調第31巻第11号

定価420円(送料270円)
(本体400円,消費税20円)